

江戸時代も富士山の噴火や元禄期の大地震など、多くの災害を経験してきているのだが、時代末期の安政年間には、異常と言ってもおかしくないほどの災害集中期であった。

この安政年間を、この時代を当時の人々はどのように感じて過ごしたのか、そしてそれが大政奉還への道筋になったのではないかと考えてみたい。それは、ここで主張している災害史観、災害死史観を、世界的には稀有なことに日本人が獲得していったという仮説の傍証となるからと考えるからである。そして、安政災害の再来はないとの保証はないからである。

怠慢の大災害可能性国

最近も青森付近での地震があり、年明けには島根県でもかなりの規模の地震があったように、東日本大震災級の大地震がいつ起こるかというタイミングに入っていると考えなければならぬというの、関東大震災の一九二三年から一〇〇年以上も経過しているから、関東では

恐怖の安政年間

NHKの大河ドラマとなった「篤姫」は、安政年間を生き抜いた女性であった。安政は幕末の一八五四年から一八五九年というわずか五年ほどの短い時代であったが、災害まみれの時代だったと言っても過言ではない。トンデモ級の混乱時代を生き抜き、よく將軍を支えた賢婦人だったとドラマ化されていた。

確かに、この後、間もなく徳川時代が終わるのだが、当時の国民一般は一つの時代の終わりが近いことを感じさせる大災害群に遭遇したのだった。

過去に起こった自然災害は、今後必ず起こりうるのだとの覚悟で、この時代を振り返る必要があると考える。何が起こったのか、地震と風水害に分けて見てみよう。(表1)

神様はなんとという試練をわれわれ日本人に与えるのだと大声で嘆きたくなる災害経験の歴史だ。残念ながら、NHKドラマ「篤姫」では江戸大地震と大風災は登場しただれども、他の災害はほとんど省略さ

安政年間の恐怖

大災害頻発の

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

下言上用

Kagen Jouyo

この程度のインターバルで大地震が繰り返されてきたからである。

日本の政治は、極端に言えばやるべきこともやらず、民間経済振興のための内需拡大を図るところか、目標・目的にもなりえない財政再建を歌うばかりで、国民の豊かさを図るところか貧困化しているにもかかわらず、ほとんど何の手も打ってこなかった。

これは、大災害や紛争非常時に對しても同じように「財政が厳しいもんね」とほとんど「ほったらかし」にしてきたのだった。例えば、大地震を受けても、紛争が生じて空襲を受けることがあっても、電線類が地中化されていないならば、たちまちに交通マヒが生じてしまうのだが、少しづつは進んでいるとはいっても、パリやロンドンの地中化率ほぼ一〇〇%に比べると戦慄すべき水準で停滞している。

核攻撃に備えるためのシェルター整備など、何もしていないというのが現状だ。中国の直近にある台湾では、シェルター設置数は一〇万を超えており、収容能力は八、六〇〇万

人で総人口二、三三三万人に對して三七〇%にもなっている。

スイスも三六万基ものシェルターが整備されて、全人口を核兵器、生物兵器、化学兵器から隔離できるための用意が実現できている。日本の中国からの距離は台湾と変わらない近さなのだが、この国では施策を整理して予算を用意し、逐次整備を進めていくどころか、そのための議論すら何もしていない。

日本の最大の脆弱性は、大地震が近い将来襲うことが確実な東京・首都圏に、人・モノ・カネを集積し続けていることなのだ。主要先進国であるG7国で「最大人口の都市圏」に集積が続いている国など存在しないが、日本以外の国ではそこを地震が襲う可能性はゼロなのである。従って、分散化はあらゆる手段を用いて達成すべき日本の喫緊の課題なのだと機会あるごとに説明しているのだが、反応を示す与野党の国会議員はほとんど皆無だ。

地震	
安政伊賀地震 1854.7.9	倒壊家屋数千戸、死者1,500人以上、大断層生まれる
安政東海地震 1854.12.23	大津波が房総から土佐まで発生 死者2~3千人、倒壊焼失家屋3万戸
安政南海地震 1854.12.24	(東海地震の30時間後)串本で15mの津波 紀州以西の家屋大半が流出・死者数千名
飛騨地方地震 1855.3.18	飛騨・金沢で死者12名、金沢城の石垣半壊
遠州灘地震 1855.11.7	安政南海地震の最大余震、袋井、掛川周辺ほぼ全滅、津波あり
安政江戸大地震 1855.11.11	出火焼失1万4,300戸、死者7,400名
北海道大地震 1856.8	日高、胆振大災害、津波被害流出93戸、倒壊106戸、死者30名
飛騨地震 1858.4.9	飛騨で倒壊319戸、死者203名、常願寺川の土石流で家屋倒壊1,600戸、溺死者140名
風水害	
安政江戸大風災 1856.9	江戸城の直近を巨大台風が通過、家屋倒壊多数、築地本願寺倒壊 高潮発生で品川、本所、深川など溺死多数、全体で10万名死亡

表1

れていた。しかし、この編集では將軍が気がふれそうになるほど時代に追い詰められていたことが十分に伝わらなかつたのではないかと。

一八五三年にはペリーが来航し、一八五四年には日米、日露、日英の和親条約を結ぶという鎖国時代には考えることもできなかった出来事が、西欧諸国の武力に圧倒される形で進行していた。国内では一八五八年には安政の大獄という大事件が生じ、徳川齊昭が蟄居させられるなどという大騒動期だった。

また、陸奥や紀州では農民一揆もあったし、さらに一八五八年にはコレラが大流行して、三万人からの人々が命を落としたのだった。先祖

はよくこの時代を乗り越えて明治維新を迎え、新しい時代を構築していったものだと思ふ。日本人の底力を頼もしくも感じるのである。

先の大戦末期も大災害集中期だったことに思いを致し、政治が混乱し国力棄損の兆しがあるときに、大災害群が押し寄せてきたことを、政治が混沌としている令和に生きるわれわれはよほどの覚悟を持って理解しなければならぬと考える。